川上宏奨学基金報告書

音楽は傷ついた心に癒しを与えたか

－東日本大震災の被災者へのインタビュー調査から－

川上宏奨学基金をいただいて「音楽は傷ついた心に癒しを与えたかー東日本大震災の被災者へのインタビュー調査からー」を書き上げることができた。論文の内容と調査の概要ついて報告する。

１．卒業論文の要旨

本論文の目的は、東日本大震災の被災者や被災地で放送を行う人と音楽の関わり方から、音楽が、どのように役立っているか／役立っていないのかを明らかにすることであった。

そこで、東日本大震災後の被災者・被災地にとっての音楽の存在について考察した。仮設住宅でのインタビュー調査の結果から、震災後に聴いていた音楽は人それぞれである一方、それらを大きく 3 つのパターンの音楽に分類することができた。「ヒーリング・ミュージック」「悲しい歌」「昔、聴いていた音・音楽」を聴いていたことがわかる。さらに、このような音楽を聴くことが被災者の「癒し」に繋がることが推察された。

さらに、音楽が被災者に与えた影響はどのようなものであったのかという点に着目した結果、ある音楽を聴くことで心が休まるという経験を認識できた。CD やラジオ、テレビから流れる音楽それ自身が、「癒し」のメディアのように働きかけるようである。人びとに寄り添い、心に負った傷を癒してくれる存在が、音楽なのである。また、音楽にまつわる人びとの支援に感謝の念が芽生えたという経験から、音楽を介した何かとの繋がりを垣間見ることができた。音楽を通して、人と人とが繋がるだけではなく、過去の自分と現在の自分が結びつくことがわかった。そこから、被災者個人に関わる「癒し」だけでなく、社会と共存するための「癒し」も存在することが理解できた。

一方、被災地で実際に音楽放送を行うラジオ局の職員へのインタビュー調査からは、震災を通じた人びとの音楽に対する考えや接し方には変化が見られたことがわかった。音楽と被災者の心情は相互に結びついており、震災直後には受け入れられなかった明るい音楽も、震災から 2 年が経過した頃には、受け入れられるようになった。そうした被災者の心情寄り添う音楽放送がされているようである。

震災前までの当たり前の日常の多くは、大震災の被害により奪われ、すぐに取り戻すことはできない状況になった。大震災後、そうした当たり前の日常にありがたみを感じた被災者がいた。それまでの日常の多くが奪われた一方で、被災地にはそれまでと同様に音楽や音が流れていた。「音楽や音が流れる」ことで、被災者は震災前までの心持ちを取り戻す

ことができたと予想される。それが役に立つか立たないかということではなく、ただそばにあるだけで安心できる存在が音楽なのではないかと感じた。

２．奨学金の主な使途である福島県および宮城県での調査の概要

被災者と音楽との関わり方を調査するため 2014 年 6 月 14 日に福島県郡山市の仮設住宅でインタビューを行ったが、インタビューをした人物（仮名）は以下の通りである。

片山さん　小林さん　山田直美さん　山田昭二さん

さらに、2014 年 11 月 23 日には、宮城県山元町を訪問し、『りんごラジオ』を運営されている高橋厚さんにインタビューを行った。

３．卒業論文を書き終えて

実際に被災地に足を運ぶことで、被災地での復興は予想以上に進んでいないことがわかった。インタビューを通して、被災者１人１人がそれぞれの傷を負っていることを改めて理解した。そのような状況の中、震災での辛い経験を涙ぐみながら話してくださった皆さまの姿は、今でも心の中に深く刻まれている。

論文を書き終え改めて感じることは、私は音楽が好きであるということ。私自身も音楽のように、相手の心に寄り添い、多くの人から必要とされるような社会人となれるよう、努力していきたい。

最後に、論文を書くにあたって後押ししてくださった、故川上宏先生とご遺族の皆さま、指導していただいた森先生、副査を務めていただいた川上先生にとても感謝しております。本当にありがとうございました。